

研究生と各界リーダーとの懇談会 〈ゲスト〉 インテカー社長 齋藤ウィリアム浩幸氏

日本経済研究センターは1月18日、ベンチャー企業支援のインテカー社長、齋藤ウィリアム浩幸氏をゲストに迎え、研究生と懇談会を開いた。

齋藤氏は学生時代から大企業を相手にビデオ会議システムや指紋認証技術などを開発してきた自らの起業経験に触れ、失敗談と成功談を交えながら失敗を恐れないことの重要性を強調した。自社では16社のベンチャー企業に出資しており、有望な企業を見抜く方法については「会社ではなく人間を評価することが大切だ」と指摘した。

日本経済の問題点に関しては、「日本の輸出に占めるパーツやコンポーネントの比重が高くなり、そうした企業の利益率が低迷している」と憂えた。さらに、米アップルのスマートフォン「iPhone（アイフォーン）」では新機種が投入されるにつれて日本の部品メーカーの採用率が低下しており、「このままでは日本がパーツ屋ですらなくなる可能性がある」と述べた。

日本企業の経営戦略については、M&A（合併・買収）では「日本企業はAcquisitionしかしておらず、Mergerの観点がない」と指摘した。R&D（研究開発）に関しても、「日本のResearchは非常に強いが、Developmentが足りない。良い技術がものにならないのはこのためだ」との見解を述べた。

その上で、イノベーションを生み出すためには「サイエンス（科学）とエンジニアリング（工学技術）に加え、最近ではデザインという要素が重要になっている」との持論を展開した。ただ、日本の教育では文系と理系を分けており、「教育に関する考え方を変えないとイノベーションで遅れをとるのではないか」と懸念を示した。

日本人の気質については「議論をするのが苦手、コミュニケーションが不足しており、お互いを信頼していない傾向がある」と分析。これは自分の弱みを相手に見せたくないというところから原因があるが、「イノベーションは失敗があってはじめて生まれるというのが本質」と主張した。「成功（Success）」の反対語は「失敗（Failure）」ではなく、「何もしないこと（Not Doing Anything）」だとして、失敗を恐れずに積極的にチャレンジすることを促した。



（予測・研修グループ）